

現象学：(『アドレリアン』より)

フッサール (1859~1938, オーストリアの哲学者) の現象学：フッサールの現象学を、ごくかいつまんで説明しますと、『現象』(それが外界の事物であれ、精神内界の出来事であれ) を了解するためには、まずすべての先入観を取り除かなければならない、と彼は主張します。この『先入観』の中には、当然、自然科学も含まれています。すべての「判断を中止」して、「すべての学問のスイッチを切り」、そうしたうえで物を見なければならぬ、と言うのです。(野田俊作：アドラー心理学の基本前提 (4) 認知論, アドレリアン第1巻第2号 (通巻第2号) : p49、1985.)

アドラー心理学は人間の主観的な意味づけを重視します。「人間は (主観的に) 意味づけられた世界に住んでいる。われわれはありのままの環境を体験するのではなく、常に人間にとっての重要性に応じて環境を (意味づけてから) 体験する。……人間であるかぎり、意味づけから逃れることはできない。われわれはわれわれの与えた意味づけを通してのみ現実を体験するのであって、現実そのものではなく、何らかの形で解釈された現実を体験するのである」とアドラーは述べています。このような立場を『認知論』または『現象学』といいます。(同上 p48)

現象[phenomenon] : 本体 (noumenon) に対立する用語. カントにおいては本体は物自体 (Ding an sich) と考えられ認識されないもので、経験のもとにあると見なされる。これに反して現象は心的状態のことをいい、感覚的に経験されるもののことをいう。(誠清心理学辞典：外林、辻、島津、能見ら編、誠信書房,1981 以下「心理学辞典」)

操作主義：特に心理学、社会科学、生命科学、物理学における研究デザインにて、**操作主義** (そうさしゅぎ、英:operationalism) とは、直に測定できないが、他の現象によってその存在が示される現象を測定するために定義する手続きのことである。ファジー概念が、理論的な概念となるように、実験による観測の条件にてはっきりと区別あるいは測定でき、また理解できるようにと、定義する手続きである。

(中略) 操作主義は、しばしば社会科学の分野においても、科学的手法や心理検査の一部として用いられている。たとえば、研究者が怒りというものを測定したい、という場合である。怒りというものは無形のものであり、怒りの存在およびその感情の大きさというものは、観察者が外から直接測定することができない。むしろ、顔の表情 (facial expression)、語彙の選択、声の大きさや調子といった他の測定手法が、外部の観察者によって用いられる。(Wikimedia より)

“By their fruits ye shall know them” (『マタイによる福音書』 7. 15-20 「実によって木を知る」)

「15 偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまといあなた方のところに来るが、その内側は貪欲な狼である。16 あなたがたは、その実で彼らを見分ける。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるだろうか。17 すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。18 良い木が悪い実を結ぶことはなく、また、悪い気が良い実を結ぶこともできない。19 良い実を結ばない喜はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。20 このように、あなたがたはその実で彼らを見分け

行動主義[behaviorism]: アメリカ心理学の主流ともいべき心理学の研究分野, 研究法をいう。1913年ワトソンは「行動主義者から見た心理学」という論文で心理学は意識内容を記述することをやめ, 客観的に観察することができ, 測定しうる行動に研究対象をしぼるべきであることを主張した。すなわち, 内観によってとらえられる意識内容(思考, 感情, 知覚など)をすて, 物理的に測定しうるものから心理学をつくりあげるべきであるという。こうした考えはソビエトの条件反射学(ベヒテレフ, パブロフ)などの影響を受け, 次第に独自の論理を発展させるに至った。行動主義の中心的研究課題は学習論であるが, これはアメリカの機能主義, ヤーキズやソーンダイクの動物心理学の実験的研究の伝統の流れをくむものである。行動主義の代表者とみなされているのは, ガスリー, ハル, スキナー, トールマン, ラシュレー, ハンター, ワトソンなどである。しかし, これらの人がすべて同じ理論にたっているわけではない。またワトソンのように物理学的に測定できる対象のみに研究を限定しているわけではない。物理学における操作主義の主唱やゲシュタルト心理学の影響もあって, 新行動主義という用語が使われたこともあるが, 特定の理論を意味するものではなく, 漠然とした意味しかない。今日では, 行動主義というより行動理論(behavior theory)という用語が包括的に使われている。(心理学辞典)

実在的自己[real self] :

自己[self] : 自分を一個の対象として経験し, 意識することをいう。(中略) 自己観察, 自己意識, 自殺, 自己知覚などの用語では, すべて自己は対象として経験される現象的自己(phenomenal self)を意味している。これに対して, 現実の人の心理的・身体的総体を自己と呼ぶこともある。ホーナイはこの意味での総体としての自己を現実的自己(actual self)とよぶ。この自己が潜在的に持っている成長発達の能力を**実在的自己(real self)**とよび, 自分がかくあれと願い, 理想とする人格と同一視されたものを理想化された自己(ideal self)とよぶ。神経症は理想化された自己にとらわれ, 実在的自己を見失うために自己の全体に障害が起きるものと考える。

(心理学辞典)

一次過程[primary process] : 一般的に原始的・無意識的な思考様式を一次過程とよび, 論理的思考様式を二次過程とよぶ。フロイトは無意識系, すなわちイドの過程は, ある考えを他の考えに置き換えるとか, さまざまな考えを一つの考えに圧縮する機構をもっていると考えた。たとえば, 夢は一次過程の代表的なものとして考えた。さらにこの原始的思考様式には, 矛盾や時間の論理がなく, 外的現実とは心理的現実によって取って代わられていることを明らかにしている。こうした一次過程の特質は, 内と外の世界の区別をなくし不快を排除しようとする快感原則に支配されていることである。(心理学辞典)